

海と対峙する暮らしのかたち —プロトタイプとしての漁村空間—

上島 顕司¹

¹正会員 国土技術政策総合研究所 沿岸域システム研究室長（〒239-0826 神奈川県横須賀市長瀬 3-1-1）
ueshima-k92y2@mlit.go.jp

現在、国土交通省港湾局が作成中の中長期政策において港町の空間形成は主要な柱の一つとして位置づけられている。今後、人口減少下の社会において、港町において有効利活用されていない地域資源を再発掘し、魅力的な空間形成を図ってゆくことがますます重要となってくる。そのためには「港町らしさ」とは何かという考察が必要不可欠である。そのため、港町と比較することによって両空間の特徴を浮かび上がらせるため、海と対峙する暮らし方の原型の一つである漁村空間について考察した。その結果、漁村空間における自然への対峙の仕方や空間構成の仕組みが、本質的なみなとまちづくりを検討する上で役立つことを指摘した。

Key Words: *fishing villeges, spatial composition, sea*

1.はじめに

高度経済成長期以降、老朽化、陳腐化した旧港地区において、臨海部における空間形成として港湾再開発いわゆるウォーターフロント開発が行われた。しかし、その後、臨海部における空間形成に係る取り組みは下火となっている。現在、行われている動きもあるが、イベント、NPOの活用等ソフト対策がメインであって、港における空間形成に係るまとまった取り組みは暫く行われていない状況にある。一方、今後も、人口減少下の社会において、防災（津波、高潮）対策、クルーズ船の来訪客の増大、既存施設・空間の再生・有効利活用等をきっかけとした「みなとまち」の空間整備が考えられ、そのような萌芽も散見されつつある。

このような中、平成 29 年 12 月に港湾における中長期政策の中間報告「PORT2030」において、クルーズ船の増大に対応し、魅力的な港町を創出すべく「空間形成」が掲げられたところである。

さらに、(財)みなと総合研究所及び国土技術政策総合研究所では、沿岸域における地域資源を有効利活用し「みなとまち」の魅力的な空間形成を図ってゆくために、有識者、関係者を交えた議論を行うこととし、平成 30 年 1 月に「新みなとまちづくり研究会」を立ち上げたところである。

同研究会では、

- ・人口減少下における新しいみなとまちの空間形成のコンセプトの提示

- ・みなとまちの空間形成にあたっての計画・空間形成手法
 - ・必要な制度・仕組み等の提言
- を行うこととしている。

さて、みなとまちづくりを実際に進めるにあたっては、「みなとまち」らしい資源を発掘、活用することが必要となる。そのためには「みなとまちらしさ」とは何かという考察が必要不可欠である。

その際、一見、回り道に見えるが、港町と比較することによって両空間の特徴を浮かび上がらせることができ、また、そもそも、海と対峙する暮らし方の原型の一つでもある漁村空間について考察することは有益であると考えられる。

そこで、プロトタイプとしての漁村空間について取り上げ、港町と比較しつつ、港町とは何か、漁村空間とは何か、海に向かって暮らすとはどのようなことか、その今日的課題は何かについて考えたい。

本稿では、2.で漁村空間と港町の空間特性についてごく簡単に整理する。3.でプロトタイプとしての漁村空間の事例を紹介する。4.で、その今日的課題について述べる。

2.漁村と港町の空間構成

漁村空間の研究としては、宮本常一の影響を受けたTEM研究所や地井昭夫氏による研究が有名である¹²⁾。地井らは、空間構成についての知見として、漁村空間は

「短冊割」であり、水面に平行な「通り」を持つ港町に対し、水面に垂直な「縦路地」が顕著であることをあげている。これは、水面、水際線を稠密に利用しようとすることから必然的にでてくる空間構成であると考えられる。例えば、舟屋で有名な伊根では、短冊型の敷地構成を持つが、その内部の空間構成は、水面側から順に舟屋、道、母屋の構成となる。母屋と舟屋は同一の家が所有しており、真ん中にある道も「中庭」由来であることを地井らが指摘している。

つまり、もともとは一軒の中庭であったものが、連坦して公共的な道になったものである。これは、漁村の一つの原型、プロトタイプであると考えられる。この道の利用者の多くは集落内の人間であり、そもそもは外部の

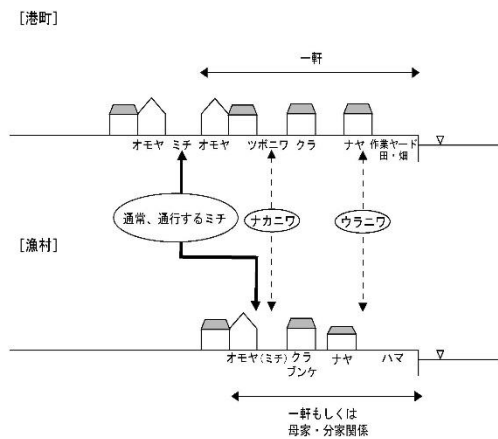


図-1 漁村とみなとまちの空間構成

・ 散居的地割	母屋、納屋、前庭(農家系)	一浜	ex. 菅浦	
・ 短冊型地割	母屋	一中庭 - 納屋	一浜	漁村原型
	母屋	一路地 - 納屋	一浜	ex. 小木
	母屋(農家系)	一中庭 - 舟屋		ex. 伊根(原型)
	母屋(農家系)	一 道 - 舟屋		ex. 伊根(現在)
	母屋	一 道 - 納屋	一物揚場	漁村一般形
	町屋	一 道 - 蔵		ex. 江戸の河岸
	町屋	一 道 - 母屋(町屋系) - 前庭		ex. 鯛(漁村)
	町屋	一 道 - 母屋(町屋系) - 中庭 - 蔵	一物揚場	港町一般形
	町屋	一 道 - 母屋	一中庭 - 納屋	ex. 久美浜

図-2 漁村の空間構成の事例

人間の通行も殆ど想定されていなかった共同体的な空間であると考えられる。なお、現在においても、丹後半島には、この空間構成において公共的な道に発展していない中庭のままの段階である事例もみられる。

また、水辺、水際線の延長に対し住居数が多い、より稠密な利用の場合は、路地が水際線に並行ではなく、水際線に垂直に入り、その両側に住居が並ぶこととなる³⁾。

森本ら⁴⁾は、この他に、農村型の敷地構成を持つ漁村も指摘している。例えば、中世からの漁村として有名な琵琶湖の菅浦などはこの例であろう。図-2に漁村の空間構成の事例を示す。

漁村の場合は、極端に言えば伊根のように海から出入りをすればよく、集落内の道は集落内だけでクローズしていてもよいのに対し、陸上交通と海上交通の結節点という機能を持つ港町は、その成立要件として、外部と結ぶ道が必要となる。このため、港町は「通り」が町並の真中を貫く構成が基本となる(図-1)。なお、西回り航路などの風待ち港、中継港として、主として岬の先端部などに置かれた港などは、例外的に異なる。

つまり、一見すると外観が同じような漁村の道と港町の道であっても、その由来や機能は異なるのである。

一方、港町は、海上交通と陸上交通の結節点であり、周辺の町と多様な連携を図ることとなる。港町と周辺の町の連携のパターンを図-3に示す。

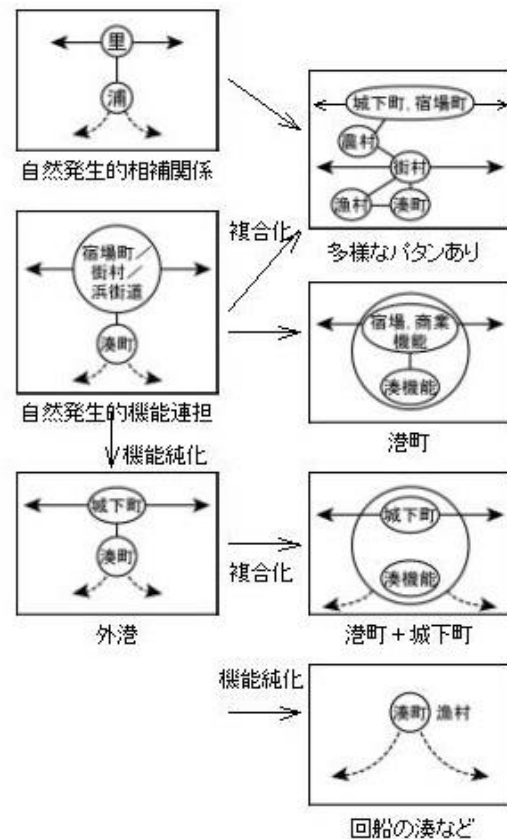


図-3 近世におけるみなとまちと周辺の町との連携のパターン

3. プロトタイプとしての漁村の事例—海と対峙する空間—

漁村空間のプロトタイプの例として京都府舞鶴市の野原をあげる^{4,5)}(写真1)。野原は大浦半島成生岬の付け根部分に位置する集落である。3方は山に囲まれており、西側は若狭湾に臨む。浜際に寄り添うように砂浜上に舟屋群が立地している。当地は外地との行き来が乏しく、交通網が発達しなかった。現在においても、半島の海岸線を一周する道路はなく、野原で道路は終わっている。また、大火災にたびたびあり、集落の殆どの建築物が建て変わっている。したがって、建物の内部構成は焼ける前と変わっていないとのことであるが、建築的、景観的な興味の対象にはならない集落である。

しかし、この集落は、

- ・ 集落の前面が埋め立てされておらず、自然海浜が残っていること。
- ・ 集落と海浜の間に集落外と集落外を結ぶ通過交通路がないこと。また、護岸などの構造物が立ち上がっていないこと。
- ・ 前面の海浜を日常的に利用していること（海浜が裏側になっていないこと）。
- ・ 「陸の孤島」的な環境であり、他地域との交流が少ないこと。

から漁村空間のプロトタイプに係る考察には適当であると考へた。集落の空間構成、利用形態等について紹介する。

a) 空間構造

集落の内部は家が密集しており、住民の集落内の通行や浜へのアクセスには、集落住居群の中心を通る「路地」と、そこから浜へと通じる細い「縦路地」（公道、私道共に存在する）が利用される。また前浜を持つ住民については、母屋—舟屋—浜と、直接浜へアクセスできる。

b) 寺社

集落の住居域を囲む形で神社が分布する。漁と山の神を祭る神社がある。海を越えた冠島には若狭湾沿岸一体の漁民の信仰を集めるオシマ神社がある。集落における唯一の寺は、集落全体が一望できる中心的な場所に立地している。

c) 墓

埋め墓と参り墓が別の両墓制という形を取る。埋め墓は、集落のはずれの海岸近くにある。参り墓は寺と共に集落全体が見渡せる高台に立地している。

d) 祭り・葬送

7月の祭りで神社をでた神輿が集落の真ん中の「路地」をとおり、埋め墓の前面の浜に浜降りをする。

葬送は各戸から真中の「路地」をとおり、埋め墓まで進む。参列者は、帰りは浜に出て、海水で手を清め、浜側から家に戻る。

送り火・迎え火も浜で行う。



写真-1 野原

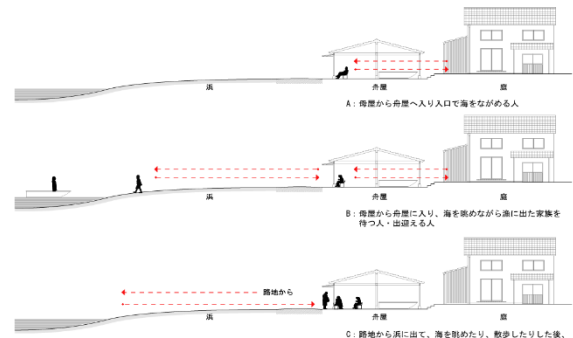


図4 行動形態のパターン

e) 行動観察

行動観察により得られた特徴的な行動パターンを図-4に示す。舟屋の前の浜では、路地から浜に出て海を眺めたり、散歩したり、おしゃべりをする人がいる。舟屋の入口は、作業の場であるとともに男性の井戸端会議の場となっている。

f) 集落における空間構造に係る認識（空間認知構造）

以上をもとに、本集落における空間構造に係る認識、空間認知構造について考察すると、まず、日常的には、居住域が「内」、海が「外」もしくは仕事場である「表」と認識されていると考えられる。

一方、葬儀や祭りの場では、一転して、「通り」が公的な行事の行われる「表」となり、浜が「裏」に変化する。つまり、居群域を中心とした「内」「外」の認識は、日常と非日常で反転する（図-5）。

また、以上の空間認知の形成には「舟屋」「路地」「浜」といった空間構成が重要な役割を担っていると考えられる。このことから、

- ・ 空間整備によって集落の住民の認知構造にどのような変化が及ぶか予測することが重要であり、地域の個性を大きく変容させる可能性のある整備に対しては、多大な熟慮が必要とされる。逆に、認知構造を考慮することにより、地域の個性との共存を図るような整備の方向性の設定が検討できる可能性もある。
- ・ 水辺は、単一の機能で用いられているのではなく、多

様な利用が重層的になされている。単に、〇〇ゾーンというようにゾーニングするのではなく、このような多様性に配慮することも重要である。

ことが指摘できる。

このような認知構造は海に対峙して暮らす一つの形と考えることができるが、地井昭夫は、なぜ、漁村空間が海を向くかという答えとして、「来方神型空間」であるからとしている²⁾。沖からくる神（寄り神など）や恵みを迎える空間ということである。

また、高桑守史は「半農半漁村」「農民漁業（網漁民集団）」と「専漁型漁村」という漁法や暮らし方が異なるタイプに分け信仰の型が異なるとしている⁹⁾。

「半農半漁村」「農民漁業（網漁民集団）」は、山アテが行われる海で漁を行い、「山ナシ」の海を、みずからの生活や支配のとどこかぬ世界として意識する来訪神型信仰（常世の国、寄神信仰、エビス信仰）を持つとしたのである。

一方、縄漁・海女・つき漁・家船などの漁法と特徴をもつ「専漁型漁村」は、竜宮信仰など、垂直的の信仰を持つとした。

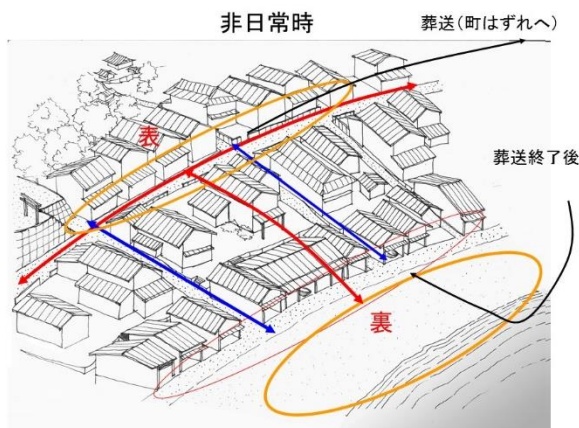
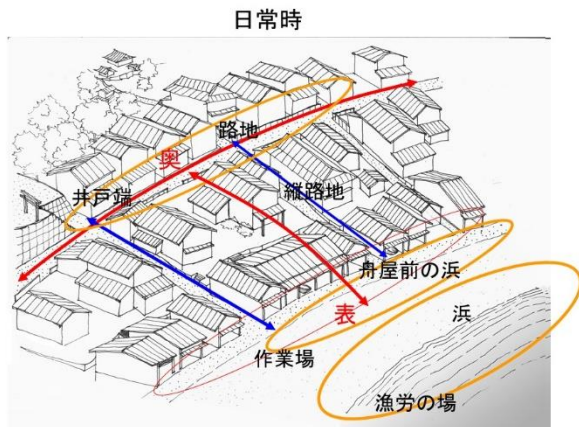


図5 日常時・非日常時における空間認知の変化

いずれにしても、プロトタイプとしての漁村は、自然、環境と対峙する暮らし方を持ち、それは、人間が本来持っている自然、環境との対峙の仕方の一つの典型でもあろう。そこから、原型、原理としての漁村空間に学ぶことは多いと考えられる。

4.今日の課題から

2. で述べた、漁村のプロトタイプにおける私的空間—私的空間（公共的利用）—私的空間という関係は、ヨーロッパの水辺におけるリゾート空間と同一の空間構成である。ニース、カンヌでは、ホテルやレストランが砂浜上を短冊状に占有して使っており、私的空間—公共的空間—公共的空間（私的占有）という関係になっている^{7,9)}。

空間構成の仕組みとしては、漁村においては、もともとは私有地が公共的に利用されたものであるが、上述のリゾート地では、もともとの公共空間（砂浜）を占有したものであるという違いがある。例えば、メントン（フランス）では海側歩道上、ヴィルフランシュ・シュル・メール（フランス）やポルトフィーノ（イタリア）では護岸上、ニース・カンヌ（フランス）では砂浜上という違いはあっても、いずれも公共空間を占有して利用している。

一方、マルセイユやジェノバ等の古くからの歴史のある港町では、私的空間—私的空間（公共的利用）—公共的空間（私的占有）という利用形態の例が見られる。

いずれにしても、様々な空間構成の仕組みのもと、公共性を担保しつつ、占有的な利用をすることにより、魅力的な水辺の空間を享受しているといえる⁹⁾。

現代的な文脈でいえば、これは、いわゆる公共施設・公共空間のオープン化の一貫と考えることができる。今後、水辺、水面等を有効活用するという展開を検討する際には、どのように公共性を担保しつつ、空間を構成していけばよいかという観点とともに、公共性を担保しつつ占有をどのようにしていけばよいかという制度的な観点が課題となる。

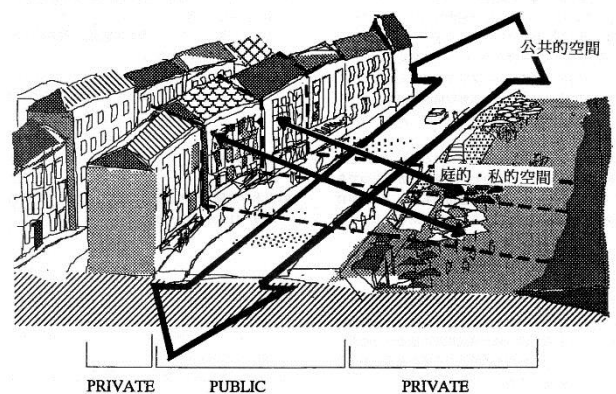


図6 ニース・カンヌの空間構成

その際、漁村空間（及びその類縁的・発展的なヨーロッパにおける水辺空間）に係る考察は役に立つと考えられる。

一方、日本におけるウォーターフロント開発は、現在、全く終わったものと認識されているが、海外においては、現在でも、ボストン、バルセロナ、ジェノバなどのように港と都市を分断する高速道路などの幹線道路を地下化させて、都市の中心部と港の中心部を連結させるなどといった大規模な港湾再開発がみられる。

これは港と都市を連結させた上での再生が、都市整備に大きな意味を持っていることの証でもあろう。

道路の地下化ではないが、象の鼻パークの整備による日本大通りと横浜港発祥の地の連携なども、日本における成功例であろう。これも、港町の本来の成り立ちに立ち返って、そのポテンシャルの重要性を活かした結果であると考えられる。

このようにプロトタイプとしての漁村空間における自然への対峙の仕方や空間構成の仕組みなどを考察しつつ「みなとまちらしさ」について検討することは、より本質的で魅力的な、みなとまちづくりに繋がるものと考えている。

参考文献

- 1) 森本孝、田村善次郎、真島俊一：海の暮らしとなりたち、ぎょうせい、1982
- 2) 地井昭夫：漁師はなぜ、海を向いて住むのか？、工作舎、2012.
- 3) 岡田威海：庭と道、鹿島出版会、1987
- 4) 安田誠、上島顕司、岡田一天、木本泰二郎：海岸と集落の係性プロトタイプの把握に関する研究-京都府野原を事例として-、土木計画学研究講演集、2004.
- 5) 斎藤潮、土肥真人、柴田久、田中尚人、上島顕司、永橋為介：環境と都市のデザイン、学芸出版社、2004
- 6) 高桑守史：「農民漁業」「海民漁業」-伝統的漁民の類型-、歴史公論10(5)、1984
- 7) 上島 顕司、善見政和、斎藤潮：都市と水辺の一体性を確保した水際空間の構成原理とデザイン、港湾技研資料 No. 940、1999. 7
- 8) 景観デザイン研究会漁港漁村部会：漁港漁村の景観、pp41-51、2001.
- 9) 篠原修、上島顕司：都市の水辺の利用思想について、新都市42(9)、1988

(2018. 4. 27 受付)